

商店街地図について

福生尋常高等小学校昭和四年入学生 昭 士 会

一 地図が出来るまで

私達同級生は、昭和四年四月福生尋常高等小学校に入學し、昭和一二年三月卒業。その後、同級生が相携えて、同級会を育て今日に及んでいる。私達は、昭和四九年に「文集五十路」を出版し、還暦を迎えるに当って、私達の生活を綴って本となすことを決め手記を募った。この時、子供の頃の生活背景を調査し、地図として残そうと話し合い、「文集五十路」の裏表紙にと考えた。

早速、昭和初年の福生村生活地図作製のための調査員を各地区から選び出した。この仕事は、同級生全員が当ることが原則であるが、次の諸氏にお願いした。

本町地区は、竹島益夫（故人）、山崎良之助（会長）、森田茂、森田孝一の諸氏。原ヶ谷戸、牛浜、中福生志茂地区は、

浜野喜代一、井上正一、木村重信、清水キヨ、市川カツ子の諸氏。長沢地区は、清水圭介、清水茂、小沢松芳の諸氏。加美地区は、中村英子、高崎伊平の両氏。永田地区は、井梅千恵子氏。調査過程では、何回も会合し、訂正をし、確認をしながら、福生村生活地図を作製した（福生市郷土資料室に寄贈）。当時図書館長であった井梅さんや前収入役の橋本さんから、昭和三年在郷軍人会作製の地図をおかしねがい、役立たせていただいた。本町地区商店街についてみると、人家が多い上に相当変わっているので、商店街だけを拡大することとし、本町同級生全員に、再度の調査をして貰った。その調査方針として次の五つを設定した。

1 同級生の家を明確にし、子供の頃の生活がわかるようにする。

2 屋号は、調べられるだけくわしく調べる。

- 3 井戸は、生活の基本であると考え残らず調べる。
- 4 路地畑、空地、山林、祠等も出来るだけ調べる。
- 5 お年寄からの話を聞く。

二 福生停車場

林山が点在し、桑畑、麦畑の中を一すじの青梅線が走っている。駅の名は「福生停車場」。福生村にとっては、活気に満ちた新開地の駅名である。地区名「福生村大字奈賀字新町」という名は、殆んどの人が知らなかったであろう。駅名即地区名として、村人に親しまれ、近郊の年寄りも「フツァテンシヤバ」と、親しみを込めて呼んでいた。

確かに、本町商店街は、近郊近在の中心的地帯をも備え交通運輸の中心地であったと思う。

これが地図から読みとれる駅前商店街であった。

駅前桜株に建てられた火の見櫓は、当時としては立派なもので、青梅市黒沢の山崎さんという方が、出来たての此の火の見櫓を写真にとり、参考にしたと聞いている。

〔一枚の写真〕58頁参照〕

三 停車場通り

駅前大通りは、メイン通りである。これに添う形で南新道、学校うらの通りや、東へ行って富士見通りが通っていた。瀬沼さんから、秋山酒屋さんに抜ける駅前と桜株の十

字路を通る青梅街道とが南北に走り、丁度基盤の目のような通りとなっていた。その間を古い九尺道が結んでいて、ここに活気に満ちた商店街が形造られたのである。また此の地区にとっての井戸は、飲料水と消火用水の確保という大切な役割りを果たした。各隣組といていい程に共同井戸があって、相互扶助の輪がこの井戸を中心に展開された。福生小学校も、明治四二年三月、加美からこの停車場に移り、村中こぞって停車場の学校へ通っていった。福生全域の子供が相寄り学び合う文字通りの福生の中心街として、停車場が位置づけられていた。

四 商店街地図をながめて

同級生の会合の時、この地図を見ながら、次の様な話が出た。一、二の例を引いて御参考としたい。

(一) 停車場市(暮の市)

停車場市は、暮の二八日に開かれた。おもちゃ屋、ダンゴ屋、正月物の店で賑やかだった。綿あめ、おしんこ菓子など珍しかったし、サクランボ菓子や、焼イカは、忘れられない。

(二) 初荷の馬

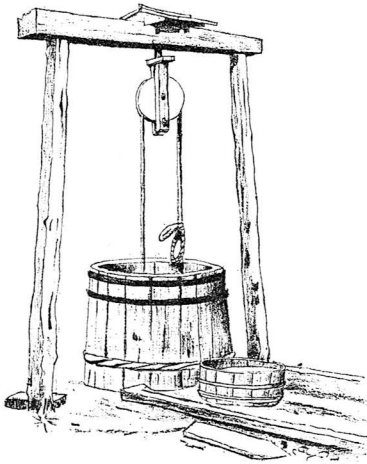
初荷の馬は、色とりどりに着飾ってとてもきれいだった。ホーキとごみ取りを持って馬の糞をよくひろった。そう言えば引田屋さんに馬が何頭かいたし、馬を飼っている家も

何軒かあった。相当数の馬に頼っていたのが当時で、荷物が福生の駅に集ったのを覚えている。

駅の構内には、倉庫が、たくさん並んでいたし、駅前に人力車の置場もあった。

商店街地図について、製作過程を中心に、その一端を紹介したが、私達はこの地図を通して、子供の頃生活した場を少しでも確かな形で残そうとして取り組んだ。それも主に記憶をたどってのことであり、違っていることもあると思う。間違いについては、お詫を乞い、御指導ご訂正をいただきたい。願うところは、此の一枚の地図が私たちに語りかけている事実を、一つでも多く読みとり、聞きとりたということである。

(文責 高崎伊平)



明治末頃の熊川の井戸
(森田家資料)

郷土料理あれこれ ①

のしこみ

今の人に「のしこみ」といってもピンとこないのではなからうか。まして、子供達には昔のことనికిこえよう。

この「のしこみ」は、小麦粉をこねてウドンのように切ったものをオツユに入れたものである。戦中派の人にすれば、スイトンかなと錯覚をするが、スイトンではなく、ウドンの短いものと思えばよい。オツユの実には、大根やネギなどを入れたが、アブラゲなんぞはいれば上出来である。この「のしこみ」のダシは、カツオブシをつかって醤油仕立てのものであった。これは、冬場の夕飯のたしにされたもので、きびしい昔の食生活をしるばせしてくれる。たまには、このようなものを作って、昔をしのぶとともに、今日の食生活のありようを考えてみたいものである。